福岡県立大学人間社会学部紀要
2006, vol. 14, No. 2, 75—94

石井十次及び岡山孤児院に関する先行研究のレビュー

細　井　　勇

要旨　本稿では、まず、筆者としての石井十次ないし岡山孤児院史研究における規範的問題意識を二つの側面から説明した。一つは、岡山孤児院事業の展開を人的ないし地域的なネットワークの拡大と変容という視点で捉えること、今一つは、岡山孤児院事業の展開を日本の近代化過程の中で慈善事業が占めた政治的位置の変容過程の中に位置づけながら捉えることである。

その上で、石井十次ないし岡山孤児院は自らを世に向かって如何様に紹介してきたのか、石井の死後、石井の人とその事業は関係者によって如何に描かれてきたのかを石井死去後の動向を踏まえつつ批判的に検討した。さらに、戦後の石井十次及び岡山孤児院に関する研究のレビューとして、問題意識や研究方法について総論的に論じた後、個別課題テーマごとに現在の研究状況について触れた。

キーワード　石井十次　岡山孤児院　慈善事業

はじめに

まず、第１に、石井十次ないし岡山孤児院は自らを世に向かって如何様に紹介してきたのか、第２に、石井の死後、石井の人とその事業は関係者によって如何に描かれてきたのか、そして第３に、これまでの石井十次及び岡山孤児院研究のレビューを行い、問題意識や研究方法について総論的に論じた後、個別課題テーマごとに先行研究を紹介し、課題を指摘していくことにしたい。

ところで、先行研究のレビュー等にあたっては、筆者なりの視点ないし問題意識を予め示しておくべきかと考える。それは概ね以下大きく二つの側面からなる。

第一の側面ないし視点は、石井の思想と実践ないし岡山孤児院事業の展開過程を人的ないし地域的ネットワークの拡がり及び変容として捉えることである。石井の思想形成については、郷里高鍋地域の教育・文化的風土と切り離して考えることはできない。岡山医学校入学の経緯から岡山孤児院創設まで、岡山と高鍋を地域的に結びつけたものは、アメリカン・ボードによる伝道と同志社英学校の設立(1875年)、その後の組合教会系教会の西日本地区における拡がり（岡山教会、高鍋教会等）であった。

創立期の岡山孤児院事業においては、渡辺亀吉、原胤昭をキーパーソンとする監獄改良事業ないし出獄人保護事業との連続性に着目する必

要がある。それは感化院（1893年９月～94年10月）の設置にも繋がっていく。この時期、濃尾震災にともなう名古屋震災孤児院の開設（1892年１月～93年12月）もあって、人的ないし地域的なネットワークは、神戸、四国（松山教会・今治教会）、名古屋、北海道釧路（釧路集治監）と拡がることになる。また、震災孤児救済においては、播州の博愛社との合同があり、また、名古屋のキリスト教が関東長老派系との繋がりが深いことから、石井の事業はより超教派的なものになっていった。こうした事業面における超教派性は石井の信仰と伝道における超教派性に通じていく。すなわち石井は、岡山教会員ではあるが、日本基督教会伝道局によって1892年岡山に派遣されてきた石田祐安とその翌年、岡山伝道義会を発足させ、『岡山基督教』（1894～1895）を創刊していく。それは超教派的な伝道活動に他ならなかった。

さらに、1898年以降の慈善音楽幻燈隊の全国的な巡回活動の時期になると、孤児救済と寄附金募集のためのより世俗的、機能的なネットワークが全国的規模で張り巡らされることになる。ここで情報媒体として機関誌『岡山孤児院新報』（1896．７～1909．５）が刊行されていく。とくに明治30年代後半になると、交流の深まった徳富蘇峰を媒介として岡山孤児院事業は国家官僚あるいは皇室との関係を急速に深めていくことになる。明治末年には、大阪事業が本格化していく。ここにおいては大原孫三郎の意向を担った秘書役柿原政一郎というキーパーソンの存在を重視していく必要があろう。この流れは石井死去後の大原社会問題研究所の創設（1919年２月）に連続していくことになる。

以上、石井十次による岡山孤児院事業は、人的ないし地域的ネットワークが、当初組合教会系教会間のネットワークから、しだいに超教派的なものへ、さらにより世俗的なものへと拡がり、かつ変容していくプロセスとしてこれを捉えることが可能であろう。

次に、第二の側面ないし視点は以下のようなものである。すなわち、これまで述べてきたような人的ないし地域的ネットワークの拡がりとその性格の変容過程としてのみ石井の思想と事業の展開を追うのではなく、日本の近代化過程の中で、慈善事業が占めた政治的位置の変容過程の中に、石井のそれを位置づけつつ批判的に検証しようとする視点である。

ここには、以下のような社会福祉学の構築にかかわる筆者の問題意識が背景にある。キリスト教社会事業史（福祉実践史）というとき、実践を支える価値はキリスト教的な隣人愛ということになろうが、その場合、なかなか制度・政策との関係性が見えてこない憾みがあろう。英国の場合、キリスト教社会主義が社会改良そして福祉国家形成に連続していく。しかしながら近代日本の場合には、明治30年代初頭の近代産業の形成期に、キリスト教社会主義や労働組合運動の始動があったが、後者は当局によって素早くその芽を摘まれてしまう。さらに日露戦争後の体制危機への対応策として、明治政府は、家族主義国家観を強調し、慈善事業を政治的に奨励するに至る。大正期には、慈善事業を批判克服の対象と見なす社会主義思想が再び強調されるようになるが、それは労働問題を中心とした社会問題を取り上げるものであって、慈善事業として展開されてきた孤児救済の実践方法を具体的にどのように批判克服して、児童の扶養問題を公共化させていくか、言い換えるなら明治末年に確立された家族主義国家観をより実際的に批判克服していく問題意識は一部の例外を

除いて不十分であった。大正中期以降の社会主義運動の急進化への国家の対応策として「国体」概念が大正末年法制度的に確立することになる。

こうした日本の近代化過程の問題の故に、実践を導くキリスト教的な隣人愛の価値観と日本的福祉国家を支える価値観ないしイデオロギーとの間には深刻な齟齬が生じたのであって、この問題を現在の社会福祉ないし社会福祉学は克服し得ていない、というのが筆者の問題意識である。

石井の思想と事業の展開過程を人的ないし地域的ネットワークの量と質の変容過程として捉えることが可能であると考えるが、同時に、ネットワークといういわば政治的に中立な概念でもって石井の思想と事業展開を捉えるのみでは、今日の社会福祉や社会福祉学構築の課題にどう連続してくるかが明確になってこない。そこで、石井の思想と実践の展開過程を、慈善事業が、日本の近代化過程の中で如何に政治的に位置づけられてきたのか、という問題意識の中で検討していくことが併せて重要であると考える。

１．石井十次ないし岡山孤児院は如何に自らの事業を世に表明していったか

近代日本における慈善事業の契機として1886年末から翌年にかけてのジョージ・ミュラーの来日がある。石井十次が孤児教育会（その後岡山孤児院と名称されるようになる）を創設するのは、1887年であって、ミュラーに倣う慈善事業としてであった。ミュラーは「人は神と人との二主に兼ね仕えることはできない」との聖書の教えに忠実であって、慈善事業を神への祈禱とそれに対する神の応答、すなわち神によって担われる事業と捉えた。したがって、ミュラーの教えに倣うことを契機とする慈善事業は、自らの実践を世に向かって表明することを潔しとしない側面を持つことになる。それでも、慈善事業としての孤児救済事業は、事業である限り、地域住民の理解や支援を必要としていくことになるので、自ら事業の趣意や孤児救済の方針と手続き、寄附金募集等について世に表明していくようになっていく。

この時期、慈善事業は伝道事業と一体的であったので、その情報媒体となり得たのは、『六合雑誌』『基督教新聞』『女学雑誌』等キリスト教系の雑誌・新聞であった。孤児教育会創設の段階からの支援者の一人であった岡山教会牧師安部磯雄は1889年10月、『基督教新聞』（324号）に石井の事業を「岡山孤児院」の名称でもって世に紹介した。続いて翌1890年、同新聞347号にても「再び岡山孤児院に就いて」の記事を掲載している。同年、渡辺栄太郎（石井と郷里を同じくし、馬場原教育会発足時岡山に赴き、同志社に入学した渡辺栄太郎は、創立期の岡山孤児院事業の支援者であった）が、孤児院の模範児たる矢野岸代について基督教新聞（382〜383号）に紹介記事を掲載している。『女学雑誌』における岡山孤児院の紹介記事は、190号（1889.12）が最初であり、その後八木数一「岡山孤児院を訪ふの記」（234号1890）がある。『六合雑誌』はユニテリアンの機関誌として社会主義思想をいち早く紹介していく役割を担うことになる。そのためか慈善事業に関する記事はほとんど掲載されていない。（ただし、時期は後になるが、1901年慈善音楽幻燈隊の巡回活動期の岡山孤児院について大西義一による記事が『六合雑誌』（243号）に掲載されている。）

慈善事業ないし孤児救済事業は、1891年の濃尾地震を契機として一挙に拡がりを見せる。地震発生前の1891年２月、本郷定次郎は暁星園を

銀座に設立、同年６月には北海孤児院が開設される。そして濃尾地震を契機として同年末、女子教育を目指していた石井（大須賀）亮一は孤女学院を創設する。さっそく『女学雑誌』(294号）は社説「孤女院の設立、大須賀亮一」を掲載している。また、同時期、石井十次は名古屋震災孤児院を開設する。翌1892年３月、『女学雑誌』(309号）は「孤児之友」欄を設置し、以後毎号、キリスト教系の孤児救済事業(慈善事業)を紹介していくことになる。

このように、近代日本における慈善事業の一典型は、プロテスタント・キリスト教の受容を背景として、とくに、ミュラーの来日と、震災孤児救済を契機として、それも孤児救済事業として展開されてきたことを確認することができる。地縁血縁関係を超えた隣人愛がいまだ社会的に理解されていない時代状況において、自らの慈善事業を情報媒体を通じて社会的に表明していくことは、社会的啓蒙という開拓的意義を有したといえよう。こうした時代性を象徴するのが北村透谷の論文「慈善事業の進歩を望む」（1894）であった。

さて、岡山孤児院としては、キリスト教慈善事業が拡がりを見せていくなかで、院独自の情報媒体として1896年７月、『岡山孤児院新報』を創刊した。こうした動きは他の孤児院にも波及していく。すなわち、上毛孤児院は1899年２月、「孤児之友」を創刊、同年、大阪に移転した博愛社は改めて「博愛月報」を刊行、東京孤児院も1900年２月、「東京孤児院月報」を創刊している。

『岡山孤児院新報』は、当初、増野悦興「孤児の父、医学博士バーナード及び其事業」(５～６号、1896)、ジョージ・ミュラーの「信仰の生涯」（７～11号、1897)、そしてエドワード・ベラミー、安部磯雄訳「回顧」(７～13号、1897）を継続掲載している。これらはおそらく『岡山孤児院新報』創刊にあたって当初から計画されていたものと思われる。しかしながら1898（明治31）年２月、慈善音楽幻燈隊の巡回活動を通じての寄附金募集が展開されるようになると、『岡山孤児院新報』の紙面はもっぱら、慈善音楽幻燈隊の活動報告や賛助員名簿の掲載で占められるようになっていく。ただ、ここで注目しなければならないのは、孤児救済の経緯が実名入りで詳しく紹介されていることである。寄附金募集のためのより世俗的な情報媒体となった『岡山孤児院新報』であるが故に、社会の同情を刺激するための方法として、孤児救済の実際例が多く提示されていくことになったと思われる。

岡山孤児院は、自らの事業の方針と内容をより体系的に冊子ないし書物の刊行を通じて世に示していった点でも他の孤児院に先行していた。以下は、その主なものである。石田祐安編『岡山孤児院』(1895)、石田祐安『新編　岡山孤児院』(1900)、森上信『岡山孤児院』(1904)、坂本義夫『岡山孤児院』(1907)、小野謙次郎『岡山孤児院』(1909）等である。これらの中でも、孤児救済の実際例が多く紹介されていることに注目しておきたい。

また、養護実践の試行錯誤を経て、一定の処遇理念に到達していくが、その内容について以下のように『岡山孤児院新報』ないし、『岡山孤児院』という冊子を通じて解説していっている。毎日繰り返される朝集会の意義は「米洗教育」として1901年の『岡山孤児院新報』(51号）ではじめて紹介された。また、1903年には、一定の年齢に達すれば施設に留め置くのではなく、社会の中での教育を意図し、これを「ライオン教育」と称して『岡山孤児院新報』(77号）を通じ

て公表している。翌年刊行された森上信『岡山孤児院』では孤児院経営法として「米洗い教育」「実行教育」「ライオン教育」等が解説されている。東北凶作地貧孤児救済直後の1906年にはバーナード・ホームに倣って小舎制度を採り、10歳以下の乳幼児について里預け制度を実施したが、それぞれ『岡山孤児院新報』を通じて説明している。1907年の坂本義夫『岡山孤児院』では、食料放任主義（満腹主義）を解説。1908年２月、処遇理念は「岡山孤児院12則」として集大成されることになるが、『岡山孤児院新報』（135号）は、これを紹介するとともに、1909年刊行の小野謙次郎『岡山孤児院』はこれを詳細に解説している。なお、石井十次自身として、児童処遇に関するものとして「孤児教養の理想」（1906）と「岡山孤児院経営談」（1911）を関係雑誌に発表している。

ところで、『六合雑誌』は、慈善事業を扱うことに消極的で、社会主義思想をいち早くこの世に紹介する役割を担ったことは既に触れた。すなわち、1896年11月号（191号）では「社会主義の必要」を早くも論じている。安部磯雄は1897年３月号（195号）に論説「社会主義に就いて」を掲載している。安部は後に「私をして遂に社会主義者たらしむるに至ったのも、畢竟するに最初慈善事業に対して深き興味を有して居たからだ」（安部1947）と回想している。社会主義者としての安部は1901年『社会問題解釈法』を著し、慈善事業が応急的で事後的な対応策である、という意味で大きな限界を有することを指摘し、最も根源的な社会問題の解決策として社会主義を提示していった。木下尚江も1903年『東京孤児院月報』（35〜36号）に「慈善談」を掲載、「慈善」を必要とする社会こそが悲惨であると説いている。本郷教会牧師海老名弾正が主筆する『新人』は社会的啓蒙の使命をもって1900年創刊されるが、執筆者として名を連ねたのは浮田和民、山路愛山、安部磯雄、鈴木文治、吉野作造等であって、岡山孤児院事業等慈善事業についての紹介記事を見出すことはできない。

以上、明治20年代、欧化主義を背景として、慈善事業は伝道事業と一体となって社会的啓蒙という意義を有していたが、日清戦争後の国家主義の台頭の中でその社会的ないし政治的位置は変容し始める。以下４点指摘したい。第１に、岡山孤児院が全国展開した慈善音楽幻燈隊の活動は、もはや伝道を直接意図しないより世俗的な慈善の啓蒙活動であった。第２に、文明開化期、普遍的な人類愛を説いていたキリスト教界においては、雑誌『新人』に代表されるように国家主義的な日本的キリスト教を唱える例が多くみられるようになっていく。第３に、明治30年前後社会主義思想が雑誌『六合雑誌』を中心にして紹介されるようになり、未だ慈善事業が社会的に定着しているとはいえない段階において早くもその限界が指摘されていくようになる。また、労働組合期成会の結成に示されるように労働組合運動の萌芽があった。こうして明治30年代社会問題が顕在化してくる時期、社会の再組織化に向けての動きが下から始動しはじめるや国家権力は、1898年３月治安警察法を公布し、労働運動の芽を摘むという強行手段に出た。第４に、社会問題の顕在化に対応するための思想と理論は、もっぱら国家学的な社会政策学が担うことになった。ただ、この時期、留岡幸助が『慈善問題』（1898）を著し、宗教と科学との統合を説いていることは注目できる。

日露戦争後になると政府は、体制危機観への対応策として慈善事業団体等の中間団体を国民統合策の一翼を担うものとして政治的に囲い込

み、奨励するようになる。すなわち内務省は、内務省主導で中央慈善協会を1908年発足させ、翌年より慈善団体に対する奨励金、助成金を交付するようになっていく。児童の扶養問題が、私事として放置できなくなっていく時代の変化の中で、言い換えるなら純然たる孤児のみを救済することを当初強調した慈善事業としての孤児救済事業が、貧困故の養育困難を引き受けざるを得なくなっていく時代の変化のただ中で、明治政府は、家族主義国家のイデオロギーでもって自らを武装し、児童扶養の社会化、公共化という時代の要請を拒んでいったといえよう（政府のこの分野への関心はもっぱら治安対策的な側面から感化法制の整備に向けられた）。それは、伝統的なキリスト教慈善事業の在り方がにわかに批判されはじめていく中で、国家は皮肉にも、これを積極的に奨励しはじめたことになる。渡辺海旭が新仏教の立場から、「慈善事業の要義」を著し、キリスト教慈善事業の在り方を間接的に批判していったのも1911年のことであった。

石井十次は、慈善事業への識者による批判に呼応するかのように、自らのこれまでの慈善事業の在り方を自己否定していくようになる。しかし、その基本的方向は、児童扶養の社会化という方向ではなく、慈善音楽会を廃止し、『岡山孤児院新報』を廃刊とし、新たな入所児を純然たる孤児に極力限定し、在籍する児童の農業的独立を図るべく事業の拠点を岡山から日向茶臼原に移す、というものであった（石井が着手した愛染橋保育所等の大阪事業は、貧困を理由とした母子分離を予防するという意図をもっていたことに注目すべきではあるが）。1914年、石井は茶臼原孤児院がしだいに理想の孤児院として整っていく姿に満足を覚え、49歳にしての生涯の幕を閉じていった。

２．石井の死後、石井の人とその事業は関係者によって如何に描かれていったか

1914年、石井十次の死去に際して多くの識者が石井についての追悼文を関係雑誌に掲載している。氏名のみ挙げると、安部清藏、柿原政一郎、増富政助、生江孝之、西内天行、星島二郎、徳富蘇峰、留岡幸助、山室軍平等である。慈善事業について触れることのほとんどなかった『新人』においても、西内（1914）、柿原（1914）、山室（1914e）それに安部清蔵（1914b）によって石井の死去について報じられている。とくに安部清蔵による「宗教家としての石井十次君」（1914b）は、石井の信仰の在り方とその変容過程を最もよく説明してくれているといえよう。また、留岡幸助がここで石井を『人道』や『福音新報』の中で「孤児の父」と形容していることに注目しておきたい。

その後、1926年岡山孤児院は大原孫三郎によって解散宣言されることに至るが、かつ、解散宣言は種々議論を呼ぶことになるが、この問題に触れる前に、石井の事業の後継者大原が、石井の事業をどのように継承しようとしたか否か、とくに大原社会問題研究所や農場学校の開設について、あるいは大正中期における児童扶養をめぐる議論について紹介しておくべきと考える。

大原は、慈善音楽幻燈会を通じて石井を知り、石井から非常に大きな精神的感化を受け、受洗していくことになるが、やや神がかり的な石井とはタイプの違う、冷静な合理主義者であった。大原は石井が死去するや、岡山孤児院事業の改革に乗り出していく。石井が手掛けた大阪事業について、1916年岡山孤児院事業から分離独立

させ、救済事業研究室を愛染園内に設置することを決定、1918年東京養育院にて経験を有する高田愼吾を研究室主任として迎えた。さらに翌1919年１月、大原は柿原をともなって高野岩三郎と会談し、創設予定の社会問題研究所について相談している。同年６月には、救済事業研究所と大原社会問題研究所は統合され、高野が所長に就任することになる。

この背景には、東大における法学・国家学からの経済学の分離・独立、しかして経済学部の新設問題、そして森戸事件、さらにはＩＬＯ代表問題があった。東大経済学部の新設を導いた高野は、東大を辞職することとなり、大原社会問題研究所が高野の受け皿となる。以後高野を通じて、東大同人会のメンバーが大原社研の中心的メンバーを占めていくようになる（大島1968参照）。国家学的な社会政策学に代わって経済学が、よりリベラルな立場から、それも東大ではなく大原社研を拠点として、しばらく政治的に制約されてきた社会主義についての研究を再開していったのである。

なお、大原は茶臼原孤児院の改革に乗り出していった。石井は開墾事業にロマンを見出し、教育を犠牲にするところがあったからである。大原は、教育を犠牲にしない孤児院経営を目指すとともに、農業指導者を養成すべく1915年松本圭一を校長として農場学校を開校していった。しかし矢作栄蔵が第３回ＩＬＯ会議（1921年）の労働者代表に松本を推薦することになり、松本の会議への出席とこれにともなう外遊中に、農場学校は閉鎖されてしまうことになる（飯塚1989参照）。石井十次の妻辰子等茶臼原孤児院の担い手達にとって農場学校は積極的に受け入れられるものではなかったようである。

大原は1901年基本金の管理者となって以来石井の事業の中心的な支援者となっていた。しかしながら、晩年の岡山孤児院事業には批判的であったと推察する。大原は社会主義者山川均との親交もあり、思想的にはよりリベラルな立場に立っており、救済事業や社会問題についての調査研究を誰よりも重視した。これに対し、日向茶臼原に事業の拠点を移した石井にとって孤児救済実践の原型は高鍋の地域的風土と密着した開墾事業にあったといえよう。おそらく、大原にとって1926年の岡山孤児院解散宣言は、石井の死去時に既に決定済みであったはずである。

ところで、大正中期には、児童の扶養問題をめぐって活発な議論が展開されるようになっていく。その中心に位置していたのが高田愼吾であった。この時期児童の扶養問題について注目されるべき論稿として以下のものが挙げられよう。添田敬一郎は「我邦児童保護の現在及招来」（1920）の中で、貧困を理由とした母子分離（児童の施設保護）がかなりの割合を占めるようになってきていること、したがって、貧困による母子分離を避けるために、アメリカの母子扶助制度（1909）に倣った制度を導入すべきことを主張している。「（答申）現時我国に於て如何なる児童保護事業の施設を急務となすや」（長谷川ら1921）は、1920年、第５回全国社会事業大会に社会事業協会から提出された児童保護に関する提案が議論沸騰一致しなかったことから、東京市内より特別委員12名を選んで審議した内容報告である。ここでは、自治行政としての家庭的養護の体制を構築していくべきことの方向性が示されている。三田谷啓「児童保護センターの提唱」（1925）は、自治体にて児童保護センターを設置すべきことを主張するものであった。守屋栄夫「家庭悲劇の防止と児童扶助立法」（1928）は、施設保護では一部の貧困問題に対応するの

みであり、公的救済は一般救護主義を採るのではなく、欧米諸国が辿る推移と同様に児童扶助法を制定すべきことを主張している。高田慎吾は、「児童保護に関する特殊機関設置の必要」（1912）、「無産児保護策に於ける新傾向」（1922）、「児童保護の経済的基礎」(1925)、「児童養育費問題に就いて」(1926) 等を著し、親による児童扶養が有する公共的意義を強調し、親の児童扶養を私事として見なす価値観の根本的改革の必要性を強調した。その主張内容は、家族主義的国家観のより根底的でかつ実際的な克服の方向を明示するものであったと考える。しかしながら高田は1927年48歳にして死去してしまう。日本の児童保護の発展を考えるとき高田の早すぎる死はなんとも残念なことであった。ともかくも、大原の「集合教育は弊害がある」（1926）との理由による岡山孤児院解散宣言は、こうした識者の論調と児童保護法案成立への期待を背景とするものであったことを確認しておきたい。

この大原の解散宣言は関係者に大きな衝撃を与えることになる。なぜなら、石井の慈善事業をモデルとして孤児救済事業の道に邁進したものは少なくなく、岡山孤児院は児童保護事業における象徴的な存在して社会的に定着していたからである。したがってキリスト教慈善事業ないし社会事業の立場からは、岡山孤児院の解散を惜しむ声が強く、大原の解散宣言内容への批判も多く展開されることになった。このとき中央社会事業協会も、『社会事業』紙上で編者として「育児事業に対する諸家の意見　岡山孤児院解散に関連して」(1926) を掲載している。

なお、既に触れたように岡山孤児院大阪分院の事業は、大原の手によって岡山孤児院から分離独立され、1918年石井記念愛染園として再出発している。これを中心的に担ったのは冨田象吉、栄子夫婦であった。冨田栄子は、『基督教新聞』紙上で多くの報告をしており、冨田象吉は、もっぱら『救済研究（その後社会事業研究）』に多くの論文を掲載している。冨田象吉による「孤児教育私言」(1913) は、孤児教育のあり方を綴ったものであるが、これまでの岡山孤児院としての養護実践の蓄積がよく生かされたものとして注目したい。

ところで、石井の伝記は当初山路愛山の手によって書かれるはずであった。そのために西内天行が残された書簡等関係資料の収集にあたっていた。しかし愛山が急逝することになり、西内がいわば代行として書き上げ、友愛社が印刷し、警醒社から発行されたのが『信天記―石井十次詳伝―』(1918) である。

昭和に入ると、石井十次伝が、「愛の使徒」「愛の人」あるいは「孤児の父」として、シンボル化されて描かれていくことになる。冨田象吉は1929年『愛の使徒　石井十次』を書いている。石井を「愛の使徒」と最初に形容したのは冨田であった。その後も錦織久良子が『愛の人石井十次』(1935) を、原澄治が『愛の人熱の人　石井十次先生を語る』(1937) を書いている。また、石井を「孤児の父」と形容したのは留岡幸助であるが、西内天行は1944年戦時体制下において改めて、『孤児の父　石井十次の生涯と精神』を書いている。

西内にせよ、冨田にせよ、思想形成期の石井を直接知る立場にはいない。冨田の場合、石井との出会いは石井晩年においてであった。この点柿原政一郎は、郷里を石井と同じくし、大原の秘書ともなり、石井の大阪事業着手を支え、また、大原の意を受け茶臼原孤児院改革を担った人物であることから、柿原の手による『石井

十次略伝』(1916) や『石井十次』(1953) は石井の実像により肉薄するものとして注目されよう。また、戦前における石井十次伝の決定版として編まれ石井記念協会から出版されたのが小野田鐵彌による『石井十次伝』(1934) であった。小野田は博愛社との合同以来石井のいわば同行者であった。ただ徳富蘇峰や山路愛山の手による評伝がないのが残念である。とりわけ名著『現代日本教会史論』(1906) の著者たる愛山による評伝が実現しなかったことが惜しまれる。

3．戦後における石井十次及び岡山孤児院研究のレビュー

ここでは、網羅的に先行研究を紹介するのではなく、まず、先行関連業績について、その背景となっている問題意識や研究の視点に注目し、社会事業史研究としての基本的課題について筆者の見解を再確認したい。その後、課題テーマごとに先行研究の現状について説明していくこととする。

まず、はじめに指摘しておかなければならないことは、戦前・戦後にかけてマルクス主義は社会科学と同一視されるほどの影響力を持つことになったことである。大河内理論に代表されるその社会政策学は、マルクス主義的な規範意識を根底にしていた。戦後の社会事業研究においては、社会事業を社会政策との関係で如何に把握するかが議論の中心を占めたが、それもマルクス主義の影響力の強さのためであったといえよう。

一方、キリスト教史ないし思想史研究においては、キリスト教慈善事業や、賀川豊彦による神の国運動、中島重に代表される社会的キリスト教等に共通して認められた人本主義的傾向に向けての根底的批判が、終末論的なバルト神学に依拠して展開されるようになっていく。近代日本におけるプロテスタント・キリスト教における神学的基礎づけの弱さの反動か、戦前・戦後にかけてのキリスト教界においてバルト神学の影響は深刻であった。

マルクス主義的な社会政策学の系譜と同時に終末論的神学を受け止めた嶋田啓一郎は、『福音と世界』(1971) の中で、中島重と賀川豊彦との親交に感謝しつつも、彼等のキリスト教に内在する人本主義的傾向を以下のように厳しく指摘している。「不幸にして賀川神学は、バルト神学にみられるような、人間的可能性の限界告白を分岐点として、徹底的な否定を通してのみ『新しき人』の可能性を認めようとする信仰の弁証法的性格を重視することが稀薄であった (240-241頁)」。これは石井についての直接の評価ではないが、石井にも当てはまるものと考えてよいだろう。以下の視摘も同様のことがいえよう。

藤田省三は、『維新の精神　第三版』(1975) の中で、賀川豊彦や山室軍平の救済事業を以下のように批判する。すなわち、それらは「人および人の関係の人による救いではないか」。「ここではキリスト教に特殊な本源的人間に関する普遍的な『救い』が現実的な特殊人の特殊面における一時的な救いに癒着され混同されているのである。信仰の超越性が伝統的に弱くて信仰がつねに道徳や習俗や運命への感傷とくっついている日本精神のもとでは宗教のこうした思想的頽廃の傾向が絶えずあるわけであるが、賀川や山室もまた社会運動家として真面目であり精力的であり不屈であったにもかかわらず否ある意味では社会運動の中に全心的に埋没したことによってこの伝統的な宗教思想の頽廃の流れの中に立ち返ったのである (103頁)」。「かくて山

室のような社会運動家はいささかも日本精神を根底から変革しようとするものではなかった（107頁）」。

ここにおいて日本（人）の思想に認められる根源的な限界が問われていることは確かであろう。しかしながら、日本的精神の根底的変革を目指すことは、一思想家の在り方の問題として重要であったとしても、それは社会福祉実践の価値観でもなければ、福祉国家の価値観でもないだろう。むしろ、そうした意味において重要なのは高田慎吾の思想と主張、すなわち親による児童扶養の公共的意義を重視し、児童扶養の社会化を、戦後民主主義の中で図っていくことではないだろうか。それが、結果として、明治末年に確立したところの個の自由に対して抑圧的な家族主義的国家観をより実際的に克服することに通じていくのではないだろうか、と考える。

次に、マルクス主義的な規範論に対抗する、今一つの社会科学的認識方法の拠り所がウエーバー宗教社会学であったといえよう。戦後のプロテスタント・キリスト教史研究において、ウエーバーの宗教社会学の研究方法は如何に応用可能であるか、という問題意識があったと考える。こうした問題意識は、日本の精神的伝統とキリスト教信仰のかかわりへの関心や、キリスト者間の交わり、それも閉鎖的にならず、むしろ宗教的な交わりを媒介として、それぞれの事業や活動を通して社会に向かって積極的に働きかけていく活動への注目に通じていこう。

こうした立場を代表するものとして、武田清子『土着と背教』(1967) や竹中正夫『倉敷の文化とキリスト教』(1979) があるといえよう。ただ、社会福祉学の構築という課題意識からみるなら、こうした視点は、慈善事業と制度・政策との関係を意識しないのであって、結果としてキリスト教史研究と社会事業史研究との関係を疎遠なものとして固定させるきらいがあるように思われる。

社会事業史研究の基本的課題は、単に資料の紹介、情報の提供ではなく、より規範的な問題意識をもってより普遍的な理論化を目指すことにあると考える。しかし、その場合、性急に結論を急ぐのではなく、実証的でより慎重な基礎資料の調査研究を土台とすることによって恣意的な理論化を可能な限り避ける必要がある。規範的問題意識として必要と筆者が考えることは、冒頭でも示したように、日本の場合、実践を導く価値観として、より普遍的な隣人愛に根拠が求められるが、一方で、それは家族主義的な日本的福祉国家の価値観との間で齟齬が生じることをどこまで自覚的に受けとめ得るか、かつ、それを、どう実際的に克服するか、という問題意識である。なぜなら、いまだ日本において少子化が社会問題化しながら児童の扶養手当（児童手当制度）が社会的に定着していないという現状が示してくれているように、日本的福祉国家の価値観として、個の自由に対して抑圧的に作用する家族主義国家観が未だ大きな影響力を有していると考えるからである。

ところで、戦後、石井十次研究を実証的研究のレベルに引き揚げようとした先駆者が柴田善守であった。その著書『石井十次の生涯と思想』（1964）は、「愛の使徒」ないし「孤児の父」としてやや抽象化的に美化されてきた伝記的石井像を一定の規範的な問題意識から批判的に再構成しようとしたものとして評価できよう。とくに本書中におさめられた碓井隆次編「付録　岡山孤児院出身の人たち―その現況の調査―」は、困難な領域における調査報告として特筆に値す

る。とはいえ本書は、実証的研究の端緒というべきであろう。というのも、実証的研究を本格化させるためには、石井記念友愛社の『石井十次資料館』に所蔵された一次資料の整理作業が欠かせないからである。石井十次が残した膨大な量の『日誌』は、児嶋虓一郎によって編集された。他の所蔵資料の整理と目録化の経緯については拙稿（2005a）で触れたのでここでは繰り返さない。

こうした研究のための条件整備と並行して、より本格的な実証的研究は、もっぱら菊池義昭の手で系統的に展開されてきたといえよう。菊池は、「岡山孤児院史研究序説」（1988）において、以下 9 つの観点を施設史研究の方法として掲げている。すなわち、①施設運営と指導者（施設経営者）の実践と思想、②院児の状況と内容、③処遇方法の発展と内容、④組織の変遷と役員、職員の実態、⑤財政の実態と内容、⑥施設環境の変遷と内容、⑦支援者の実態と活動、⑧音楽活動写真隊の巡回と反響、⑨退院後の院児の状況、である。菊池の施設史研究という方法の前提にあるのは、石井は思想家ではなく、実践者である以上、その思想を研究しようとするなら、石井が書き残した文字資料に依拠した分析・検討ではなく、むしろ石井が担った事業の分析・検討からその思想を究明することこそが、研究対象の性格に符合する研究手法である、という判断である。おそらくこれは妥当な判断であり、手堅い方法であろう。さらに、岡山孤児院の運営管理体制と児童処遇との関係性を重視していることも評価される点であろう。

菊池による一連の系統的研究成果の全体像をここで紹介する余裕はないが、敢えて以下筆者なりに課題を指摘したい。冒頭でも示した二つの視点から見れば、施設史研究という方法はやや自己完結的な研究方法であり、事業展開における人的ないし地域的ネットワークが、組合教会から、超教派へ、さらにより世俗化したネットワークへと変容していく過程や、日本の近代化過程において慈善事業が占める政治的位置が変化していくことへの目配りが不十分となるのではないだろうか。実証的な研究にはその前提として、規範的な問題意識が欠かせないと考える。この点が不十分であるなら、施設史研究は、従来の石井十次伝の非実証性を批判克服しようと意図しながら、石井の思想と事業を後追い的に評価することに通じてしまい、結果として、従来の伝記と質的に近似したものに陥る危険性があるように思う。

以上、研究方法をめぐる総論的な問題提起であったが、次に、視点を変え、規範的問題意識の必要性の問題を一端棚上げすることとして、以下 9 項目について課題テーマごとに現在の研究状況について一瞥し、個別的研究課題と思われることに触れていきたい。

⑴　高鍋、日向茶臼原における石井十次と茶臼原孤児院研究

岡山医学校入学以前の石井十次研究としては、西内天行の『信天記』における叙述内容を大きく超えるような研究は見られない。『信天記』の内容を改めて検討する余地はあるように思われる。その後、『高鍋町史』（1977）が編まれ、安田尚義が『高鍋藩史話』（1998）を出版している。これらを踏まえ、改めて高鍋藩の教育文化的風土の中での石井の思想形成について検討されるべきであろう。例えば、⑴幕末における秋月種樹の昌平坂学問所奉公など、藩校明倫堂と昌平坂学問所との関係、また、⑵石井の攻玉社入学の前提となる高鍋と東京芝の攻玉社との関

係、(3)晩翠学舎について、(4)馬場原教育会発足時の岡山への５人の同行者、岩村加次郎、渡辺栄太郎、萱島諸秀、石黒畋十郎、押川猪之吉について、さらに調査研究されるべき余地があろう。晩翠学舎については「晩翠学舎と城先生」(石川1973）や「晩翠学舎資料について」(石丸1991,92)がある。また、岩村加次郎については「岩村加次郎と石井十次―岡山孤児院の設立とボード系教会形成―」(細井1999b）がある。渡辺栄太郎や萱島諸秀も継続して岡山孤児院事業や高鍋教会と関係しているので、関連研究として今後の課題と考える。

石井は岡山孤児院の創設とほぼ同時に日向茶臼原に土地を確保し、以後、石井は岡山孤児院事業と並行ないし連続させて郷里の地域振興事業を担っている。この点については「石井十次による地域福祉実践―その教育福祉実践と地域振興との連続的展開について―」(細井1998）が部分的に触れている。そして岡山孤児院茶臼原農林部は、1908年茶臼原孤児院へと改称されていく。そこでの内容については、菊池の系統的な研究の一部として解説されている。

(2)　岡山医学校時代の石井十次研究

岡山医学校時代の石井十次を取り上げたものとして、「石井十次の医学生生活」(杉井1966)、「岡山医学校時代の石井十次―使命の探求―」(葛井1986)、「岡山医学校時代の石井十次―神の愛の実践に向けて（上）（下）」(葛井1988)、「霊性の人、石井十次」(葛井1989)、「石井十次、青春の彷徨―J. H. ペティーとの巡り合い―」(本井1999) 等がある。これらは石井のミュラーとの間接出会いを契機とする孤児教育会の設立、そして医学校の退学に至る経緯に関する研究であり、内容上(8)の項目と連続する。

(3)　孤児教育に関して

石井はその事業を「孤児教育会」との名称でもって開始したことによく言い表されているように、石井は、ミュラーに倣う実践という意味においてどこまでも慈善事業としての岡山孤児院事業ではあるが、その起点を馬場原教育会の発足に求め、その終着点として茶臼原孤児院における農業的独立自活運動があったと見るなら、石井の生涯を貫く事業は「孤児教育」であったと言え、この意味では、1890年11月の孤児院学校設立こそが岡山孤児院事業の実質的な事業開始と言えなくもないだろう。こうした視点から、岡山孤児院事業を児童養護実践史であると同時に教育史として捉えていくことが必要であるように思われる。これに関する論稿として、「石井十次の教育思想と学校教育」(金谷1991)、「石井十次と孤児院学校の設立」(細井1997b)、「石井十次と岡山孤児院―その孤児教育実践の変容とその背景―」(細井2005b）等があるが、教育内容に踏み込んだより系統的な研究が今後の課題であろう。

(4)　監獄改良事業との連続性について

創立期の岡山孤児院事業においてはその監獄改良事業（感化院を含む）との連続性に注目する必要がある。両事業を結びつけたキーパーソン渡辺亀吉については「渡辺亀吉と石井十次」(細井1999a）がある。また感化院については、「岡山孤児院感化部の失敗」(藤原1998）がある。亀吉に刺激を受けて神戸で出獄人保護事業を展開した村松淺四郎について紹介したものとして、『二青年』(アッキンソン1898)、『日本基督教社会事業史』(生江1931)、「松村淺四郎」(三浦1999)がある。

(5) 震災孤児救済と慈善音楽幻燈隊について

1891年10月28日の濃尾地震発生にともなう震災孤児救済は、近代日本における慈善事業ないし孤児救済事業にとっての一大契機となった。岡山孤児院としての震災孤児救済については、「石井十次と震災孤児院―濃尾震災救済活動のなかで―」(中西1999) や「濃尾震災での救済と岡山孤児院の運営体制」(菊池1999c) 等がある。

1898年から開始される慈善音楽幻燈隊について、一色哲は「メディア」や「ネットワーク形成」という視点から以下の論文でこれを意欲的に取り上げている。すなわち「メディアとしての音楽幻燈隊と岡山孤児院」(1995)、「メディアとしての音楽幻燈隊と岡山孤児院―『彼は金を得我は人を得ん』―」(1999) である。菊池はその系統的研究の一環として「岡山孤児院の音楽幻燈隊（活動写真）隊の活動と養護実践のかかわり―研究の目的と全体的動向を中心に―」(1997b) を書いている。門司関門地区のキリスト教史を扱う安東は「明治期の関門北九州地域における岡山孤児院による慈善活動」(2004) を著し、岡山孤児院による慈善音楽幻燈会が一過性のものではなく、継続性を持ち、地域に密着するものであったことを確認している。

ところで、岡山孤児院による慈善音楽幻燈隊あるいは地方委員制度は、上毛孤児院等いくつかの孤児院（育児院）に影響を与えているので、全国的な動向についてさらに調査検討していく必要があろう。

(6) 東北凶作地貧孤児救済について

東北凶作地貧孤児救済について、最も早い時期から、他の施設の動向も触れながら詳細に論じてきたのは菊池義昭である。論文として、「東北三県凶作貧孤児救済と音楽活動写真隊の活動内容」(1997c)、「岡山孤児院の財政と東北三県凶作貧孤児収容の影響―非借金主義の脱線と新しい養護実践等の模索―」(1998e)、「東北三県凶作貧孤児収容後の岡山孤児院の運営体制―1,200人規模の施設をどう運営したか―」(1999d) 等がある。

(7) 児童処遇方法について

石井は、渡英した山室軍平を通じてバーナード・ホームの資料を得て、バーナードに倣って10歳以下の乳幼児について近隣の農家に里預けすることを1906年制度化した。これについては「石井十次による岡山孤児院経営と里親制度」(細井1997a) がある。10歳頃までの乳幼児は里預けし、10歳頃に達すれば施設で引き取るというこの方法に倣って、上毛孤児院等いくつかの施設が同じような試みを実施している。そこでの内容や制約等についてさらに全国的動向の把握が目指されるべきであろう。

また、岡山孤児院では、その試行錯誤の養護実践を通じて、しだいに一定の養護理念に到達していくプロセスがあって注目されるところである。この点については、「岡山孤児院の養護実践と『岡山孤児院十二則』の内容と到達点」(菊池2005a) と「岡山孤児院の出版物に見る『岡山孤児院十二則』形成過程の概要」(菊池2005b) がある。

(8) 石井の信仰ないし伝道活動について

慈善事業としての岡山孤児院は、岡山教会等の組合教会を中心とした宗教的ネットワークの中で創設された。資金的に石井の事業を中心的に支えたのはアメリカン・ボードであった。したがって岡山孤児院の創立過程は、新島襄によるアメリカン・ボードの支援を受けての同志社

英学校の設立、アメリカン・ボードによる岡山ステーションの設置と岡山教会等組合教会の西日本地区における形成史という文脈の中で捉える必要がある。この意味から「岡山県における初期の教会形成」（竹中1959）や「アウトステーションからステーションへ―岡山ステーションの形成と地域社会―」（守屋2004）は基礎研究として挙げられよう。また、留岡幸助研究の第一人者である室田保夫は「一国の良心―新島襄、ラーネッド、ベリー、そして石井十次」（1994）の中で石井と同志社との関係に触れている。

その後、石井は超教派的な伝道活動に乗り出すことになるが、このとき、石田祐安や西内天行、それに岡山教会牧師安部清蔵が共にそれを担っていたので、『信天記』（西内1918）や「宗教家としての石井十次君」（安部1914b）における石井の信仰の在り方とその変容の経緯に関する記述内容は説得的である。田中和男による「石井十次を支えた人々―石田祐安と東洋伝道会―」（1996）は、石井の超教派的伝道活動の推移を纏めたものである。

木原活信「石井十次にみるジョージ・ミュラー観の変遷過程」（1996）及び「ジョージ・ミュラーが石井十次に及ぼした影響」（1999）は、石井の信仰の在り方の変容過程をジョージ・ミュラーへの傾倒の変容過程として捉えていて注目される。筆者としても石井の思想・信仰の変容過程に関心があって「『ギブソン馬太傳講義』と石井十次」（2002）や「近代日本のキリスト教と慈善―石井十次を中心に―」（2004）を著してきた。なお、先行研究を踏まえてそれらを批判的に検討しようとしたものとして「石井十次の思想新論―その社会性をめぐって」（姜2005）がある。

⑼　大阪事業について

大阪をフィールドとした社会事業史研究の第一人者である永岡正己は、「石井十次と大阪事業の展開」（1999）を書いている。この他、大阪事業に触れたものとして、「石井記念愛染園における『幼稚園』と『保育所』」（太田1980）、「岡山孤児院附属愛染橋保育所の成立と展開」（井村2004）がある。大阪事業を中心的に担ったのが冨田象吉・栄子夫妻である。象吉については「冨田象吉」（宍戸1971）が、栄子（ヱイ）については、「冨田ヱイ」（宇都1973）や「石井十次愛染園と我が母・冨田ヱイ」（茨木1988）がある。ここでは、冨田栄子が、山田わか等による母子保護法制定運動にかかわっていくことが指摘されている。また、資料紹介として、「大正期の社会事業のネットワーク―史料・岡山孤児院大阪分院週報―」（小野2001）と「岡山孤児院大阪事務所の開設（上）（下）―日誌・自明治四〇年一月至治四一年三月―」（小野、小笠原2003）がある。船曳美千子による「岡山孤児院大阪事務所での『見習奉公児女の監督』活動」（2004）は、自立支援（アフターケア）の視点からの分析として注目できよう。

おわりに

これまで取り上げることはできなかったが、炭谷小梅、大原孫三郎、林源十郎、徳富蘇峰等と石井との交流史研究は関連研究として重要である。また、東洋救世軍構想や岡山孤児院の国家・皇室との関係、それに海外殖民などいくつもの重要な論点がある。さらに、石井ないし岡山孤児院研究においては『石井十次日誌』や『岡山孤児院新報』『庶務日誌』『年報』等の他に、関係書簡の系統的分析検討作業が重要な意味を持つことを指摘して、今後の筆者の課題とした

い。

引用・参考文献

【戦前】

安部磯雄、1889、「岡山孤児院」『基督教新聞』324号

安部磯雄、1890、「再び岡山孤児院に就て」『基督教新聞』347号

安部磯雄、1901、『社会問題解釈法』東京専門学校専門部

安部磯雄、1947、『安部磯雄自叙伝　社会主義者となるまで』明善社

安部清蔵、1914a,「噫石井十次君」『基督教世界』1585号

安部清蔵、1914b,「宗教家としての石井十次君」『新人』15巻２号

アッキンソン、村上俊吉、1898、『二青年』警醒社書店

藤井米八郎、1892、「岡山孤児院を見る感」『女学雑誌』300号

原澄治、1937、『愛の人熱の人　石井十次先生を語る』岡山石井記念協会

長谷川良信他、1921、「（答申）現時我国に於て如何なる児童保護事業の施設を急務となすや」『社会事業』５巻５号

星島二郎、1914、「霊界の偉人故石井十次氏を憶ひて」『六合雑誌』398号

石田祐安編、1895、『岡山孤児院』岡山孤児院活版部

石田祐安、1900、『新編　岡山孤児院』岡山孤児院新報社

石井十次、1898、『新刊　岡山孤児院　全』（1961、『明治文化資料叢書』６巻　風間書房）

石井十次、1906、「孤児教養の理想」『人道』20号

石井十次、1911、「岡山孤児院経営談」『慈善』３編１号

柿原政一郎、1914、「故石井十次君略歴」『新人』15巻２号

柿原政一郎、1916、『石井十次略伝』岡山孤児院事務所

柿原政一郎、1953、『石井十次』日向文庫刊行会

木下尚江、1903、「木下尚江氏の慈善談」『東京孤児院月報』35〜36号

北村透谷、1894、「慈善事業の進歩を望む」『評論』25号

増野悦興、1896、「孤児の父、医学博士バーナード及び其事業」『岡山孤児院新報』５〜６号

益富政助、1914、「故岡山孤児院長石井十次先生」『鉄道青年』６巻３号

光延品識、1891、「岡山孤児院西尾勝之助伝」『基督教新聞』432号

森上信、1904、『岡山孤児院』岡山孤児院活版部

守屋栄夫、1928、「家庭悲劇の防止と児童扶助立法」『社会事業』11巻10号

生江孝之、1914、「石井十次氏の長逝」『護教』1176号

生江孝之、1931、『日本基督教社会事業史』教文館

錦織久良子、1935、『愛の人　石井十次』日曜世界社

西内天行、1914、「石井十次先生を思ふ」『新人』15巻２号

西内天行、1918、『信天記―石井十次詳伝―』警醒社書店

西内天行、1944、『孤児の父　石井十次の生涯と精神』教文館

小野田鐵彌、1934、『石井十次伝』石井紀念協会

小野謙次郎、1909、『岡山孤児院』岡山孤児院

大原孫三郎、1926、「集合教育は弊害がある」『人道』249号

大原孫三郎談、1939、「熱情人石井十次の横顔」『復興』820号

大西義一、1901、「岡山孤児院に就いて」『六合雑誌』243号

坂本義夫、1907、『岡山孤児院』岡山孤児院活版部

三田谷啓、1925、「児童保護センターの提唱」『社会事業』９巻８号

添田敬一郎、1920、「我邦児童保護の現在及招来」『社会と救済』４巻３号

高田慎吾、1912、「児童保護に関する特殊機関設置の必要」『慈善』３編４号

高田慎吾、1922、「無産児保護策に於ける新傾向」『大原社会問題研究所パンフレット』４号

高田愼吾、1925、「児童保護の経済的基礎」『大原社会問題研究所雑誌』３巻２号
高田愼吾、1926、「児童養育費問題に就いて」『社会事業研究』14巻１号
高田愼吾、1928、『児童問題研究』同人社書店
徳富蘇峰、1914a、「石井十次の死を悼む」『国民新聞』大正３年２月８日号
徳富蘇峰、1914b、「追悼　石井十次君」『救済研究』２巻３号
徳富蘇峰、1926、「岡山孤児院の行衛」『人道』249号
留岡幸助、1898、『慈善問題』警醒社書店
留岡幸助、1906、「石井十次と岡山孤児院」『人道』20号
留岡幸助、1914a、「孤児の父石井十次（上）（下）」『福音新報』971～72号
留岡幸助、1914b、「孤児の父石井十次」『人道』106号
留岡幸助、1926a、「岡山孤児院解散―『感慨無量』」『人道』249号
留岡幸助（人道社論）、1926b、「倫敦孤児院と岡山孤児院」『人道』250号
冨田栄子、1936、「何故に要望するか」『社会事業研究』
冨田象吉、1913、「孤児教育私言」『救済研究』１巻３号
冨田象吉、1924、「故石井岡山孤児院の追憶」『社会事業研究』12巻10～11号
冨田象吉、1925、「故石井岡山孤児院の追憶」『社会事業研究』13巻１号
冨田象吉、1929、『愛の使徒　石井十次』四貫島セツルメント
渡辺栄太郎、1890、「岡山孤児院孤児略歴　矢野きしよ」『基督教新聞』382号
渡辺海旭、1911、「慈善事業の要義」『新仏教』
渡辺亀吉、1894、「渡辺亀吉君自叙伝」『岡山基督教』２～３号
渡辺亀吉、1896、「渡辺亀吉君の自叙伝」『獄事叢書』25号
八木数一、1890、「岡山孤児院を訪ふの記」『女学雑誌』234号
山路愛山、1906、「現代日本教会史論」『基督教評論』警醒社書店
山室軍平、1913、「石井十次君」『慈善』５編４号
山室軍平、1914a、「石井十次君」『ときのこゑ』436号
山室軍平、1914b、「石井君と金森先生」『ときのこゑ』438号
山室軍平、1914c、「石井十次氏逝く」『福音新報』971号
山室軍平、1914d,「石井院長より受けたる感化」『人道』106号
山室軍平、1914e、「石井十次君を思ふ」『新人』15巻２号
山室軍平、1926、「石井十次君と私」『人道』250～252号
財団法人中央社会事業協会（編者として）、1926、「育児事業に対する諸家の意見　岡山孤児院解散に関連して」『社会事業』10巻５号

【戦後】

赤松力、1990、『近代日本における社会事業の展開過程―岡山県の事例を中心に―』御茶の水書房
安東邦昭、2004、「明治期の関門北九州地域における岡山孤児院による慈善活動」『北九州市立大学大学院紀要』18号
葛井義憲、1986、「岡山医学校時代の石井十次―使命の探求―」『名古屋学院大学論集《人文・自然科学編》』22巻２号
葛井義憲、1988、「岡山医学校時代の石井十次―神の愛の実践に向けて（上）（下）」『名古屋学院大学論集《人文・自然科学編》』24巻２号～25巻１号
葛井義憲、1989、「霊性の人、石井十次」『近代日本社会とキリスト教』同朋舎出版
葛井義憲、1992、『闇を照らした人々』新教出版社
藤田省三、1975、『維新の精神　第三版』みすず書房
藤原正範、1998、「岡山孤児院感化部の失敗」『非行問題』
船曳美千子、2004、「岡山孤児院大阪事務所での『見習奉公児女の監督』活動」『石井十次資料館研究紀要』５号

細井勇、1997a、「石井十次による岡山孤児院経営と里親制度」『福岡県立大学紀要』第５巻第２号

細井勇、1997b、「石井十次と孤児院学校の設立」『福岡県立大学紀要』６巻１号

細井勇、1998、「石井十次による地域福祉実践―その教育福祉実践と地域振興との連続的展開について―」『地域福祉研究』26号

細井勇、1999a、「渡辺亀吉と石井十次」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋舎

細井勇、1999b、「岩村加次郎と石井十次―岡山孤児院の設立とボード系教会形成―」『キリスト教社会福祉学研究』32号

細井勇、2002、「『ギブソン馬太傳講義』と石井十次」『石井十次資料館研究紀要』３号

細井勇、2004、「近代日本のキリスト教と慈善―石井十次を中心に―」『石井十次資料館研究紀要』５号

細井勇、2005a、「石井十次と岡山孤児院の養護実践の基礎的研究―研究の経緯、研究の視点と目的―」（科研費報告書）『石井十次と岡山孤児院の養護実践の基礎的研究』

細井勇、2005b、「石井十次と岡山孤児院―その孤児教育実践の変容とその背景―」（科研費報告書）『石井十次と岡山孤児院の養護実践の基礎的研究』

細井勇、2005c、「石井十次と炭谷小梅―石井十次発炭谷小梅宛書簡を中心に―」（科研費報告書）『石井十次と岡山孤児院の養護実践の基礎的研究』

細井勇、2005d、「石井十次と徳富蘇峰―徳富蘇峰発石井十次宛書簡を中心に―」『石井十次資料館研究紀要』６号

茨木真理子、1988、「石井十次愛染園と我が母・冨田エイ」右田紀久恵・井上和子編『福祉に生きたなにわの女性たち』編集工房ノア

飯塚恭子、1989、『祖国を追われてＩＬＯ労働代表松本圭一の生涯』キリスト新聞社

池本美和子、2001、「石井十次と岡山孤児院に関する歴史的研究の動向」（科研費報告書）『日本における社会福祉施設の歴史研究』

池田敬正、2001a、「石井十次と近代日本」『石井十次資料館研究紀要』２号

井村圭荘、2004、「岡山孤児院附属愛染橋保育所の成立と展開」『中国四国社会福祉史研究』３号

石井記念愛染園、1958、『石井十次略伝』石井記念愛染園

石井記念愛染園、1958、『愛染園60年の歩み』石井記念愛染園

石川正雄、1973、「晩翠学舎と城先生」『史友会報』５号

石丸恵守、1991、「晩翠学舎資料について」『史友会報』27号

石丸恵守、1992、「晩翠学舎資料について」『史友会報』28号

一色哲、1995、「メディアとしての音楽幻燈隊と岡山孤児院」『キリスト教社会問題研究』44号

一色哲、1999、「メディアとしての音楽幻燈隊と岡山孤児院―『彼は金を得我は人を得ん』―」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋舎

金谷達夫、1991、「石井十次の教育思想と学校教育」『操山論叢』26号

木原活信、1996、「石井十次にみるジョージ・ミュラー観の変遷過程」『キリスト教社会問題研究』45号

木原活信、1999、「ジョージ・ミュラーが石井十次に及ぼした影響」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋舎

菊池義昭・大阪譲治、1988、「岡山孤児院史研究序説」『キリスト教社会福祉学研究』20号

菊池義昭、1997a、「岡山孤児院の全在院児と養護実践の動向―入退院児童の統計的分析を中心に―」『共栄学園短期大学紀要』13号

菊池義昭、1997b、「岡山孤児院の音楽幻燈隊（活動写真）隊の活動と養護実践のかかわり―研究の目的と全体的動向を中心に―」『共栄児童福祉研究』４号

菊池義昭、1997c、「東北三県凶作貧孤児救済と音楽活動

写真隊の活動内容」『東北社会福祉史研究』16号
菊池義昭、1998a、「創立期の岡山孤児院の財政と養護の関わり―明治20年代の財政実態を中心に―」『共栄学園短期大学研究紀要』14号
菊池義昭、1998b、「大正期の岡山孤児院の財政の特色と実績―石井十次の死以後の財政と実践の関係―」『社会事業史研究』26号
菊池義昭、1998c、「明治20年代後半の岡山孤児院の財政と実践の動向―実業部の拡大と濃尾震災での孤児救済の影響―」『東北介護福祉研究』創刊号
菊池義昭、1998d、「明治20年代後半から同30年代の岡山孤児院の財政と実践の動向」『共栄児童 福祉研究』５号
菊池義昭、1998e、「岡山孤児院の財政と東北三県凶作貧孤児収容の影響―非借金主義の脱線と新しい養護実践等の模索―」『東北社会福祉史研究』17号
菊池義昭、1998f、「大正期の岡山孤児院の財政の特色と実績―石井十次の死以後の財政と実践の関係―」『社会事業史研究』26号
菊池義昭、1999a、「明治40年代後半からの岡山孤児院の財政と石井十次の死」『東北介護福祉研究』２号
菊池義昭、1999b、「創立期の岡山孤児院の運営体制と養護―研究の目的と運営組織および職員の実態―」『共栄児童福祉研究』６号
菊池義昭、1999c、「濃尾震災での救済と岡山孤児院の運営体制」『キリスト教社会問題研究』48号
菊池義昭、1999d、「東北三県凶作貧孤児収容後の岡山孤児院の運営体制―1、200人規模の施設をどう運営したか―」『東北社会福祉史研究』18号
菊池義昭、2000a、「明治20年第後半の岡山孤児院の運営体制と茶臼原移住(1)」『共栄学園短期大学研究紀要』16号
菊池義昭、2000b、「明治20年第後半の岡山孤児院の運営体制と茶臼原移住(2)」『東北介護福研究』３号
菊池義昭、2000c、「明治30年代前半の岡山孤児院の運営体制と寄付募集組織の強化(1)」『共栄児童福祉研究』７号
菊池義昭、2000d、「明治30年代前半の岡山孤児院の運営体制と寄付募集組織の強化(2)」『石井十次資料館研究紀要』創刊号
菊池義昭、2000e、「明治30年代後半の岡山孤児院の運営体制と財団法人化―東北三県凶作貧孤児収容等の準備体　制がどのように整って行くか―」『東北社会福祉史研究』19号
菊池義昭、2001a、「明治40年代中半の岡山孤児院の運営体制と三部制の成立(1)」『共栄学園短期大学研究紀要』17号
菊池義昭、2001b、「明治40年代中半の岡山孤児院の運営体制と三部制の成立(2)」『共栄児童福祉研究』８号
菊池義昭、2001c、「石井十次の死と岡山孤児院の運営体制の縮小」『石井十次資料館研究紀要』２号
菊池義昭、2001d、「大正期の岡山孤児院の運営体制と大原理事時代(1)」『共栄学園短期大学研究紀要』18号
菊池義昭、2002a、「大正期の岡山孤児院の運営体制と大原理事時代(2)」『共栄児童福祉研究』９号
菊池義昭、2002b、「大正期の岡山孤児院の運営体制と大庭理事時代(1)」『東北社会福祉史研究』20号
菊池義昭、2002c、「大正期の岡山孤児院の運営体制と大庭理事時代(2)」『石井十次資料館研究紀要』３号
菊池義昭、2002d、「石井十次の岡山孤児院での養護実践とは―日本における児童養護実践の源流―」『世界の児童と母性』53号
菊池義昭、2003a、「岡山孤児院の解散と運営体制の経緯(1)」『共栄児童福祉研究』10号
菊池義昭、2003b、「岡山孤児院の解散と運営体制の経緯(2)」『共栄学園短期大学研究紀要』19号
菊池義昭、2003c、「石井記念協会での養護実践と財政概要―岡山孤児院解散後を引き継いだ組織と活動―」『石井十次資料館研究紀要』４号
菊池義昭、2003d、「1907年前後の岡山孤児院の物的環境

条件の拡充整備の実態〜1200人規模の施設を支えた建物群の内容〜」『東北社会福祉史研究』22号
菊池義昭、2005a、「岡山孤児院の養護実践と『岡山孤児院十二則』の内容と到達点」（科研費報告書）『石井十次と岡山孤児院の養護実践の基礎的研究』
菊池義昭、2005b、「岡山孤児院の出版物に見る『岡山孤児院十二則』形成過程の概要」『石井十次資料館研究紀要』 6 号
岸本憲二、2004、『石井十次にめぐりあった人々』吉備人出版
姜 克實、2005、「石井十次の思想新論―その社会性をめぐって」『岡山大学文学部紀要』43号
三浦賜郎、1999、「松村淺四郎」『更生保護制度施行50周年記念　更生保護史の人々』日本更生保護協会
守屋茂、1960、「岡山孤児院と石井十次」『近代岡山県社会事業史』岡山県社会事業史刊行会
守屋友江、2004、「アウトステーションからステーションへ―岡山ステーションの形成と地域社会―」同志社大学 人文科学研究所研究叢書『アメリカン・ボード宣教師―神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869〜1890 年』
本井康博、1999、「石井十次、青春の彷徨―J.H.ペティーとの巡り合い―」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋舎
室田保夫、1992、「石井十次と『岡山孤児院新報』」『密教文化』178号
室田保夫、1994、「一国の良心―新島襄、ラーネッド、ベリーそして石井十次」『キリスト教社会福祉思想史の研究』不二出版
室田保夫、1998、「石井十次と東洋救世軍」『キリスト教社会問題研究』46号
室田保夫、1999、「石井十次と東洋救世軍」（同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋舎
永岡正己、1999、「石井十次と大阪事業の展開」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋舎
中西良雄、1999、「石井十次と震災孤児院―濃尾震災救済活動のなかで―」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋舎
小笠原慶彰、小野修三、松田隆行、2003、「岡山孤児院大阪事務所の開設（上）―日誌・自明治四〇年一月至治四一年三月―」『四天王寺国際仏教大学紀要』35号
小野修三、2001、「大正期の社会事業のネットワーク―史料・岡山孤児院大阪分院週報―」『慶応義塾大学日吉紀要 社会科学』12号
小野修三、小笠原慶彰、松田隆行、2003、「岡山孤児院大阪事務所の開設（下）―日誌・自明治四〇年一月至治四 一年三月―」『慶応義塾大学日吉紀要社会科学』13号
大濱徹也、1979、『明治キリスト教会史の研究』吉川弘文館
大島清、1968、『高野岩三郎伝』岩波書店
太田素子、1980、「石井記念愛染園における『幼稚園』と『保育所』」『保育政策研究』 1
坂本忠次・赤松力、1997、「石井十次の林源十郎宛書簡をめぐって」『倉敷の歴史―倉敷市史紀要―』 7 号
坂本忠次、2002、「岡山孤児院の解散問題をめぐる覚書―石井十次の林源十郎宛書簡を通じて」『倉敷の歴史―倉敷市史紀要―』12号
柴田善守、1964、『石井十次の生涯と思想』春秋社
柴田善守編、1992、『石井記念愛染園八十年史』石井記念愛染園
嶋田啓一郎、1971、『福音と世界』日本基督教団出版局
宍戸健夫、1971、「冨田象吉」岡田正章他『保育に生きた人々』風媒社
杉井六郎、1966、「石井十次の医学生生活」『思想の科学』51号
杉井六郎、1999、「『石井十次日誌』にあらわれる徳富蘇峰」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋舎
高橋彦博、2001、『戦間期日本の社会研究センター　大原

社研と協調会』柏書房
鷹津繁義、1953、『石井記念愛染園三十五年小史』社会福祉法人石井記念愛染園
武田清子、1967、『土着と背教』新教出版社
竹中勝男、1940、『日本基督教社会事業史』中央社会事業協会社会事業研究所
竹中正夫、1959、「岡山県における初期の教会形成」『キリスト教社会問題研究』３号
竹中正夫、1979、『倉敷の文化とキリスト教』日本基督教団出版局
田中和男、1996、「石井十次を支えた人々―石田祐安と東洋伝道会―」『キリスト教社会問題研究』45号
田中和男、1998、「明治中期における少年非行への対応―石井十次と留岡幸助の『実践』の意義―」『キリスト教社　会問題研究』46号
田中和男、1999、「孤児の運命―石井十次を支えた人々―」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋舎
田中和男、2000、『近代日本の福祉実践と国民統合―留岡幸助と石井十次の思想と行動―」法律文化社
田中真人、1999、「石井十次の皇室観・国家観」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋舎
時本堅、1951、『孤児の父　石井十次』富士出版社
内田守、1962 、「岡山孤児院の御下賜金問題と徳富蘇峰との関係」『日本談義』136号
宇都栄子、1973、「冨田ヱイ」『社会事業に生きた女性たち』ドメス出版
山野光雄、1974、「石井十次孤児院事業の開拓」『社会保障の先駆者たち』時事通信社
安田尚義、1998、『高鍋藩史話』鉱脈社